気管・気管支結核の病理解剖学的研究

第2報 腸及び喉頭結核との関連

国立療養所清瀬病院

島村喜久治・吉田 則武

(昭和 28 年8月20日受付)

I 緒 言

前報[1]において気管より Segmental bronchi に到る間の気管支結核について，分布・頻度・空洞との関係その他について論じたので，同じ材料について，本報では，成因考察の一助として，他の管内性結核症（腸及び喉頭結核）との関連について論じてみたい。以下，本報において気管・気管支結核というのは，第1報と同じく，気管より Segmental bronchi に到る間の気管・気管支結核である。

II 研究の対象と方法

第1報と同じ材料のうち，記録並びに材料の不十分な例を除いて，131 例について研究した。肉眼的所見を主としたが疑わしい場合は，第1報と同じく組織標本を作つて検討した。

III 腸結核との関係

位置的に連続している喉頭結核との関連については前報[1]でふれたので，省略する。腸結核との関係は第1表のようであつた。

これでみると，気管・気管支結核と腸結核の併存する例は 77%，両者とも欠くものは 6.9% で，結局，両者の平行するものは 83.9% であつた。明らかに相関がある。しかし，喉頭結核との関連[1]に比して，腸結核との関連性はやや劣り，腸結核あるもの 115 例中，気管・気管支結核を欠くものは，喉頭結核の場合の約4倍に当る 14 例（12.1%）であつた。

第 1 表 腸結核との関係

	腸結核のあるもの	腸結核のないもの	計
気管・気管支結核のあるもの	% 101(77.0)	7 (5.4)	108 (82.4)
気管・気管支結核のないもの	14(10.7)	9 (6.9)	23 (17.6)
計	115(87.7)	16 (12.3)	131(100.0)

IV 腸結核並びに喉頭結核との関係

気管・気管支結核，腸結核及び喉頭結核の3者の関連をみると第2表のようであつた。3者ともあるものが最も頻度が高くて56.5%，3者とも欠くものは 6.9% であつた。喉頭結核だけあつて他の2者を欠くものは1例もなかつたが，腸結核だけあつて他の2者を欠くものは 8.4%，気管・気管支結核だけあつて他の2者を欠くものは 3.8% であつた。すなわち，この3者はかなりの頻度で相互に合併していた。

第 2 表 腸及び喉頭結核との関係

		喉頭結核(＋) 腸結核(－)	喉頭結核(－) 腸結核(＋)	喉頭結核(＋) 腸結核(＋)	小計	喉頭結核(－) 腸結核(－)	計	総計
気管・気管支結核のあるもの	例数	2	27	74	103	5	108	131 (100%)
	%	1.7	20.4	56.5	78.6	3.8	82.4	
気管・気管支結核のないもの	例数	0	11	3	14	9	23	
	%	0	8.4	2.3	10.7	6.9	17.6	

V 気管・気管支潰瘍と腸の潰瘍との関係

この両者の潰瘍の質について調査してみたが，一定の関係はみられなかつた。そこで，潰瘍の数について調査してみたのが第3表である。

第 3 表 腸潰瘍との関係

気管・気管支結核 ＼ 腸結核	潰瘍数 0	潰瘍数 ≦30	潰瘍数 >30	計
潰瘍数 0	10	20	10	40
潰瘍数 ≦ 5	6	14	22	42
潰瘍数 ≦20	0	4	8	12
潰瘍数 >20	0	8	29	37
計	16	46	69	131

この表からわかるように，気管支に多数の潰瘍がある場合は，必ず腸にも潰瘍があつ

た。逆に，腸に潰瘍がある115例の中 30例（26.1%）には気管支に潰瘍を見なかつた。

VI 考　　按

以上の事実から考えてみると，気管・気管支結核は，腸結核，喉頭結核と同じく，多くは管内性に，直接，接触感染によつて起るものであろう。しかし，この3者を並べてみると，感染源（転移源）からの距離やそれぞれの臓器のもつ特異性のためか，その発生頻度だけからみても差が示される。

たとえば前記のように，気管・気管支結核は腸結核よりも喉頭結核の方により強い関連性を示す。すなわち第1及び2表からみて，腸結核があつて気管・気管支結核を欠くものは14例（12.1%）もあるが，喉頭結核の場合は3例（2.3%）であつた。また第2表からみても，腸結核だけあつて喉頭にも気管支にも結核性変化を欠くものは8.4%あつたが，喉頭結核だけあつて他の2者を欠くものは1例もなかつた。また第3表からすると，気管・気管支に多数の潰瘍がある時は，腸にも潰瘍があるが，逆の場合は 26.1% もの例外がある。従つて，3者の中では腸結核が最も起り易いといえるだろう。第1表及び第2表から131例の結核屍のもつていたそれぞれの率を算出してみると，腸結核 87.7% 気管・気管支結核82.4% 喉頭結核 60.5% となる。

Auerbach[2] によると，気管支，喉頭及び腸のいずれにも結核のあつたもの 51.8% 3者の中喉頭結核のみ欠くもの 30.1% 腸結核のみ欠くもの 3.2 %で，気管・気管支結核の 85% は腸か喉頭のいずれか或いは両方に結核性変化があつたという。また Salkin et al[3] によると腸結核があるものの中，気管支結核のあるものとないものの比は 1.4:1 であつたが，喉頭結核の場合は同じ比が 2.9:1 であつたという。同じ計算をしてみると，われわれの材料では前者は7:1後者は 25:1 になる。絶対値に大差はあるが，やはり喉頭結核は位置的に気管・気管支結核に近いだけに腸結核よりも併発し易いといえるだろう。

VII 結　　論

気管・気管支結核は，同じく管内性に発生する腸結核及び喉頭結核と密接な関連をもつ。131 体の結核屍について調査してみると，この3者とも欠くものは，6.9% にすぎないが，2者以上をもつものは 80.9% 3者を有するものは 56.5% であつた。3 者の頻度は腸，気管・気管支，喉頭の順に少かつた。喉頭結核は位置的に近いだけに気管・気管支結核とよく合併するが，それ自身として最も起り易いのは腸結核であつた。

文　　献

1) 島村・吉田：結核，24，427，1949.

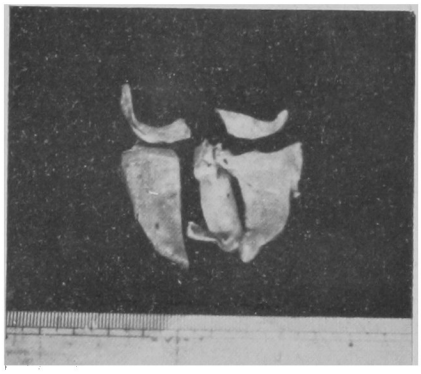
2) Auerbach： Amer. Rev. Tbc.60, 604, 1949.

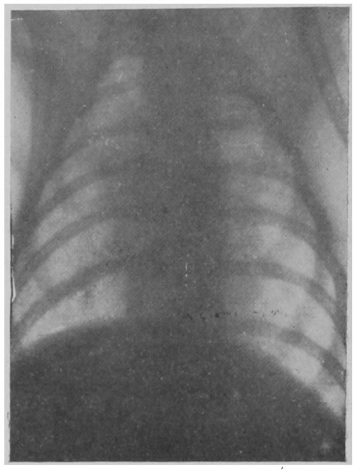
3) Salkin et al： 9 bid. 47, 351, 1943.

家兎肺結核症の TB1 による治療実験

神山英明・北沢幸夫・太田茂男

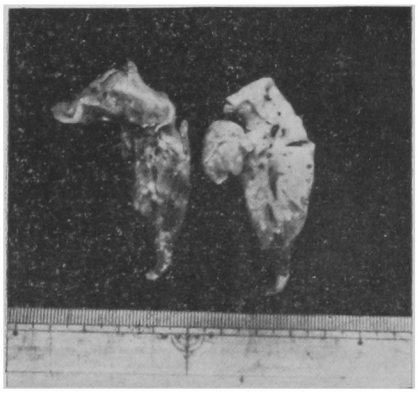
第 1 図

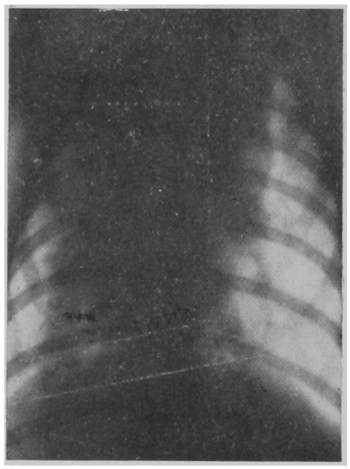




感染直後より TB1 200mg 宛プロピレングリコールに溶解して皮下注射レ線像は感染後5週目

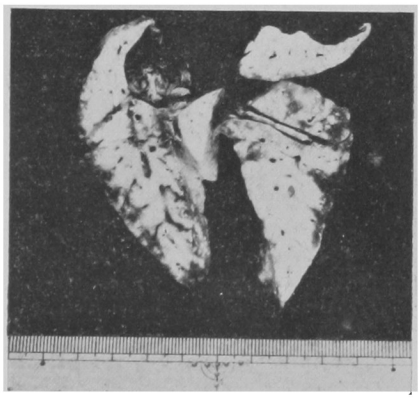
第 2 図

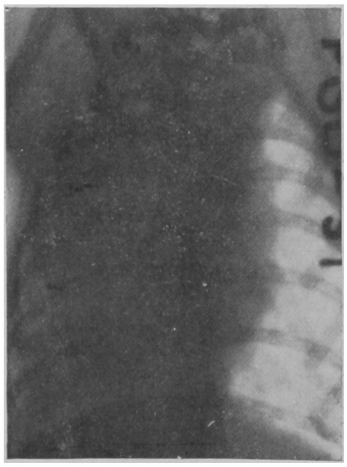




感染1日後より TB1 100mg 宛経口投与レ線像は感染後5週目

第 3 図





対照例
レ線像は感染後4週目
剖検所見は各例とも背腹方向に撮影